経験の尊さ

百ぺん聞くより
一度自分の目で見ることだ
百ぺん見るより
一度自分の手で触ってみることだ
百ぺん触るより
一度自分で験みてみることだ
百ぺん験（ためして）みるより
一度自分で悟ることだ
自分の目で見たもの
自分の手で触ったもの
自分の体で体験したもの
自分の心で悟ったものが本物だ
本物だけが光り
本物だけが残る

〈　遠藤　俊夫　〉

この詩のように、自ら体全体で対象に働きかけ、関わっていく体験活動では、「聞く（聴覚）」「見る（視覚）」「触れる（触覚）」などを働かせ、物事を感覚的にとらえることが大きな意味を持ちます。体験活動はこうした感覚を総動員し、感性を最大限伸ばす可能性があるのではないでしょうか。また地域と交流することで、共存の精神、自他共に大切することを学んでいくように思います。

「体験学習」‥ 子どもたちに「生きる力」を育むためには、自然や社会の現実に触れる実際の体験が必要である。子どもたちは、具体的な体験や事物との関わりをよりどころとして、感動したり、驚いたりしながら、「なぜ、どうして」と考えを深める中で、実際の生活や社会、自然の在り方を学んでいく。そして、そこで得た知識や考え方を基に、実生活の様々な課題に取り組むことを通じて、自らを高め、よりよい生活を創り出していくことができる。このように、体験は、子どもたちの成長の糧であり、「生きる力」を育む基礎となっている。しかしながら、今日、子どもたちは、直接体験が不足しているのが現状であり、子どもたちに生活体験や自然体験などの体験活動の機会を豊かにすることは極めて重要な課題となっていると言わなければならない。こうした体験活動は、学校教育においても重視していくことはもちろんであるが、家庭や地域社会での活動を通じてなされることが本来自然の姿であり、かつ効果的であることから、これらの場での体験活動の機会を拡充していくことが切に望まれる。　「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（中央教育審議会）